

あとがき

山形 辰史

本書の著者の野上裕生は、二〇一二年五月二日にこの世を去った。本書は、アジア経済研究所が出版する月刊誌である『アジア研ワールド・トレンド』に、二〇一〇年一月号から二〇一一年一二月号まで、二四回にわたり連載された「すぐに役立つ開発指標の話」を編集したものである。編集には、佐藤百合、新田淳一、山形辰史があたった。

本書に収録されたインタビューにおいて、野上はこの連載を「アジアを見る眼」としてまとめたい、という意思を明らかにしている。本書は、野上の遺志にしたがい、遺稿をまとめたものである。

野上裕生は一九六一年、東京都に生まれた。桐朋中学・高等学校を経て、一橋大学で社会学部に籍を置いている。しかし、本書に収録されたインタビューに示されているように、もともと理系志望であったうえに、一橋大学で数学を学べる環境があったこと、高校時代

から開発途上国に興味をもっていたこと、開発途上国を含む国々とアメリカとの国際関係を研究する油井大三郎助教授（当時）に師事したことから、徐々に開発経済学へ傾倒していく。

一九八四年にアジア経済研究所に入所し、最初の八年間は統計部（後の統計調査部）に所属して、アジア諸国の景気予測を担当した。一九九二年四月より一九九四年三月までの二年間、アジア経済研究所から一橋大学大学院経済学研究科に国内留学し、経済学修士号を得た。同大学院においては、松田芳郎、溝口敏行両教授の下で、所得分配について研究した。

一九九四年にアジア経済研究所に復帰すると、野上は当初は調査企画室、その後は総合研究部（後の開発研究部）に配属され、より自由に研究テーマを選ぶことが可能となる。これ以降野上は、マクロ経済のみならず、社会開発分野にも研究の幅を広げていく。

業績目録に現れているように、一九九四年までの野上の業績の中心は、景気循環や景気予測モデルのようなマクロ経済をテーマにしたものであった。その後、一橋大学での研究を反映して、研究分野を所得分配や人的資本形成へと展開した。そして二〇〇〇年代に入ると、民主主義、人間開発、環境、ジェンダー、貧困、人口、障害、雇用といった社会開

発的な分野に研究成果を開花させていく。そして二〇一〇年代に入ってからにはマクロ経済モデルの研究を再開した。

野上の研究の真骨頂は、二〇〇〇年代の社会開発分野の研究にあった。弱者に向けられる目の温かさは、その弱者が置かれた状況の厳しさに対する義憤と表裏一体であり、さまざまな社会問題の研究を、涉猟することくに展開させた。そしてそれぞれの分野の文献を読み込むことで、すべての分野の専門家としての基礎知識を蓄積していった。このような研究分野の広さが、本書に結実している。

また野上は、おびただしい数の研究成果を発表している。論文の数もさることながら、小論・解説、そして書評が多い。いかに多くの書を読み、そして分かりやすい一般向けの文章を書いていたか、ということが業績リストに現れている。

さらに職場の同僚として強調しておくべきことは、野上の査読数の多さである。査読とは、原稿執筆後に、匿名の査読者が、当該原稿を読み、出版の可否を判定するとともに、修正のための提案をする作業を指す。これは、匿名であるがゆえに、その苦労が他人の目に触れない業務である。野上が大学卒業から生涯を通じて勤務したアジア経済研究所は、月刊誌として『アジア経済』（現在は季刊）、季刊誌として *The Developing Economies* を出版

しているほか、単行書も年に一〇点以上出版している。これらに掲載される論文は、査読をもとに掲載の可否を検討したうえで出版がなされている。したがって、年間を通じておびただしい数の査読が所内でなされているのであるが、あまり報いれない作業であるだけに、誰もが査読を引き受けること及び腰になる。そんななかで野上は、その研究分野の広さもあって、査読の依頼が多く、そしてそのほとんどの依頼を引き受けていた。近年では、月に一本以上、年間でも約二〇本という、同僚からみれば驚異的な査読の本数をこなしていた。査読は、アジア経済研究所外の学会や大学、研究機関が出版する雑誌においても必要とされる作業であり、野上は、国際開発のみならず、環境、人口といった分野の雑誌からも査読を依頼されることが多かったようである。このようにして、皆が忌避しがちな作業を、進んで引き受けたことは、業績リストに現れない、野上の学問的貢献である。

野上の死は唐突であった。二〇一二年五月二日に入院し、連休明けの五月七日には、入院のため実行不可能となった仕事を、筆者を含む、周囲の同僚に電話で依頼した。本人は、ほどなく退院できると思っていたのだろう。その依頼は一時的な委任であって、快復後には自らが再び担うという意思が表れていた。しかし、その二週間後に野上は昇天した。

野上の死は突然であったが、その一方で野上は、常に死を強く意識しながら、毎日の生活を送っていたように思われる。筆者は、野上が講演会のような公の場で、「私なんか、いつ死ぬかわからない」「私なんか、生きている価値がない」といった一見捨て鉢な科白を、微笑みを浮かべながら、発するのをたびたび目にした。節制を要する持病と、生涯折り合つて暮らしていかなければならない、という諦観が、これらの科白に込められていた。

死への意識は、生き急ぐように、野上を仕事へと駆り立てたのではないか。野上が、論文のみならず、書評や初心者向けの小論にも努力を傾注したことは、衆目の一致するところである。自らの弱さを強く意識し、それがゆえに弱者への共感を糧にして、精力的に研究を続け、そして執筆、講演を通じて研究を発信し続けたのが野上の職業生活のすべてであった。悔いが残らないわけではなかるうが、力の限り他人のために研究し尽くした、といえるのではないだろうか。本書をもって野上は、研究のうえでの遺言を、われわれに託したことになる。

(二〇一三年一月 ジェトロ・アジア経済研究所 国際交流・研修室長)